

新会長選出と将来の大会開催地決定

ICED 代表者会合 ロンドンで開催

6月11日、教育開発(FD)に関する国際的なコンソーシアムであるInternational Consortium for Educational Development (ICED)の各国代表者によるカウンシル・ミーティングが、英国・ロンドンのグリニッジ大学で開催された。世界各国からオンライン参加者を含む約40人が参加し、活発な議論が交わされた。

このたびは、各国のFDの実施状況について報告が行われた。特に多く聞かれたのは、教員研修のオンライン化やハイブリッド化の事例である。これは、コロナ禍を経て世界的に教育現場のデジタルトランスフォーメーションが加速している現状を反映していたもの。また、近年急速に普及している生成AIへの対応についても、多くの国で高い関心が寄せられており、FDにおける新たな課題として認識されていることが示された。

ミーティングでは、ICEDの会長交代も行われた。これまで会長を務めてきた米国代表のドナ・エリス氏から、新たにスイス代表のアリアナ・デュモント氏へと引き継がれた。デュモント氏は英語を母語としない初めての会長となり、ICEDの国際的な多様性を象徴する人事として注目された。

次に、今後の会議開催地も審議した。選挙の結果、2027年は台湾で、そして2028年の学会大会は日本での開催が決定した。日本での大会誘致プレゼンテーションを行った東京大学の佐藤浩章教授(日本高等教育開発協会理事)は、今回の決定について次のように語る。

「日本での開催を通して、日本のFD担当者が



世界と出会う機会とした。また、アジア各国と連携を強化する機会としたい」。日本がアジア地域における教育開発のハブとしての役割を果たすことへの強い意欲を示している。

なお、来年2026年6月には、スペイン・サラマンカで学会大会の開催が既に決定しており、今後のICEDの活動はさらに活発化することが期待される。

今回のミーティングは、世界各地の教育開発の現状と課題を共有し、今後の方向性を議論する上で非常に重要な機会となった。特に、オンライン化や生成AIといった先端技術への対応、そしてグローバルな連携強化は、今後の教育開発における主要なテーマとして、引き続き注目されるだろう。